

●まとめ

雄略天皇は、息長系王族の血を引く、古代の理想の大王でした。天智朝において、中大兄皇子へと人心をまとめるためにこの歌は作られました。そして、持統朝に『万葉集』巻一の原撰部が編集されたとき(注8)、この歌は現王朝のはじまりを語る歌として、その冒頭に置かれることになりました。『万葉集』巻一の原撰部は、平城王朝(平城京を都とする王朝)の歴史を語るものであると私は考えています。『万葉集』巻一の語る歴史と息長系王族との関係については、続く舒明天皇の歌(12)についての考察で詳しく述べたいと思います。

注1 西郷信綱『西郷信綱著作集 詩論と詩学Ⅰ 万葉私記・古代の声』平凡社、二〇一〇。

注2 大室幹雄『園林都市』三省堂、一九八五。

注3 石見清裕『唐代の国際関係』山川出版社、二〇〇九。

注4 森公章『倭の五王』山川出版社、二〇一〇。

注5 土屋文明『万葉集私注』筑摩書房、一九四九。

注6 駒木敏『和歌の生成と機構』和泉書院、一九九九。

注7 小川靖彦『万葉集 隠された歴史のメッセージ』角川書店、二〇一〇。

注8 伊藤博『万葉集の構造と成立 上』塙書房、一九七四。

●百済出兵と一番歌

一番歌の「そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れしきなべて われこそ座せ」は、大和の全域を武力で平定した大王である雄略天皇に、いかにもふさわしい言葉です。ただし、一番歌は雄略天皇が実際に作った歌ではありません。このことは歌の末尾型式から確認できます。一番歌の末尾は、「われこそは告らめ 家をも名をも」というように、五三七で終わっています。このような長歌の終わらせ方は、五三七解結型といって、斉明天皇から天智天皇の時代（六五五〜六七二）にうたわれた長歌に特徴的に見られる末尾型式です（注6）。

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つ行かむを
しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さふべしや（1
一七）

一七番歌は、天智六年（六六七）に白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた天智天皇が近江京へと遷都したとき、額田王が大和の象徴である三輪山に別れを惜しんでうたった歌です。結句「情なく 雲の 隠さふべしや」が五三七のかたちで終わっています。一番歌が五三七結解型を持つということは、この歌が額田王と同じ時代に作られた歌であることを示しています。

雄略天皇の歌が天智天皇の時代に作られたのは、雄略天皇が息長系王族と関係の深い大王であることと関係しているようです（注7）。息長系王族とは、近江国坂田郡息長（現在の滋賀県米原市。三上山を中心とする地域。）を本拠地とした王族です。名前に「息長」が入っていることが多いです。『古事記』によれば、雄略天皇の父は允恭天皇、母は忍坂大中津比売です。忍坂大中津比売は、応神天皇（仲哀天皇と息長帯日売との子）と息長真若中

比売との子である若野毛二俣王と息長真若中比売の妹である百師木伊呂弁の子であるというように、息長系王族と強い血縁を持っています。実は、天智天皇も息長系王族との強い血縁を持っています。天智天皇は舒明天皇と皇極・齐明天皇との子ですが、舒明天皇（息長足日広額天皇）は欽明天皇と息長真手王の娘の広姫との子である押坂彦人大兄皇子の子であり、皇極天皇は押坂彦人大兄皇子の孫です。雄略天皇は、天智朝において、現王朝の始祖的な天皇として考えられていたのでしょうか。

雄略天皇と天智天皇との間にはもう一つの共通点があります。雄略天皇も天智天皇も、共に滅亡した百済を復興するために、代わりの百済王を立てて朝鮮半島に出兵した天皇です。雄略天皇は、高句麗軍に殺害された蓋鹵王の代わりに文周王を立てて、高句麗と戦いました。天智天皇は、唐軍に降伏した義慈王の代わりに、人質として大和にいた義慈王の王子の扶余豊璋を立てて、唐・新羅と戦いました。

なお、百済救援戦争に際して、天智天皇は即位していません。はじめ遠征軍を率いていたのは母の齐明天皇でしたが、齐明天皇は筑紫の朝倉宮で亡くなってしまいました。以後、皇太子の中大兄皇子（後の天智天皇）が百済救援戦争の指揮を執ることになりましたが、天皇を失って、唐・新羅連合軍と戦うために臣下の気持ちの一つにすることは中大兄皇子にとって急務でした。そこで、臣下の気持ちをまとめるための象徴として、中大兄皇子と同じ息長系王族の血を引き、諸豪族と力を合わせて百済を復興させた雄略天皇が選ばれたのではないかと私は考えています。雄略天皇の歌はそのときに作られて、臣下の前で披露されたのでしょうか。百済救援軍の前將軍は上毛野稚子、後將軍は阿倍比羅夫でした。救援軍の將軍の一人が、倭王武との関わりが深かった阿倍氏出身であるのも、偶然でないように思われます。

えるでしょう。また、大王の恩顧を得て、領地を失うこともないでしょう。

③【刀の作成者】刀を作る者はイタワ。銘文を記したのは張安です。

「典曹」とは文官のことだと考えられています。ワカタケル大王の名が彫り込まれた稻荷山鉄剣と江田船山鉄刀によって、ワカタケル大王の支配領域が少なくとも埼玉から熊本まで広がっていたことが明らかになりました。これらの国々を平定するために、上表文に記されていたように、ワカタケル大王は自ら甲冑を纏って、たくさんの山河を踏み越え、席を温める暇もなく戦ってきたのでしよう。ワカタケル大王は、大和国や朝鮮半島を武力で平定した偉大な大王だったのです。『日本書紀』には、雄略天皇の軍事作戦として、父の安康天皇を殺した眉輪王を庇った葛城円大臣を焼き滅ぼしたこと、新羅と結んで反乱を起こした吉備下道臣前津屋、吉備上道田狭を滅ぼしたこと、高句麗を破って新羅に攻め込んだこと、百済を復興させて高句麗と戦ったことなどが記されています。

●大王の歌

『万葉集』巻一の巻頭には、「泊瀬朝倉宮に天の下知らしめし天皇の代」（雄略天皇の時代）の歌として、「天皇の御製歌」が載せられています。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘
ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おし
なべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそ
は 告らめ 家をも名をも (11)

一番歌については、土屋文明（注5）が「野外で菜を採っている処女に直ちに呼びかけて、婚を求められるといふ趣である。さうした求婚法は当時はしばしば行はれた」と述べているように、古注釈では「籠」「堀串」を持って農作業をする「賤女（しづめ）」に天皇が求婚した歌であると理解されてきました。しかし、娘は「賤女」ではありません。娘子の身分が高いことは、天皇が娘子に対して「菜摘ます兒」「名告らさね」と敬語を使っていることから分かります。

一番歌とよく似た状況でうたわれた歌が、『古事記』雄略天皇条に載せられています。雄略天皇は、丸迹の佐都紀の臣の娘である袁杼比売を妻とするために春日の里に赴いたとき、道で娘子に出会います。天皇の姿を見た娘子が岡辺に逃げ隠れたのを見た天皇は、

嬢子の い隠る岡を 金鉏も 五百箇もがも 鉏き撥ぬるも
の (記九九)

という歌をうたいます。そして、その夜の豊明において、嬢子とは天皇に結婚の承諾を意味する大御酒を献上しました。嬢子は袁杼比売だったので、天皇が春日の里の岡辺で出会った嬢子が丸迹氏の姫君であったように、一番歌で天皇がうたいかけた娘子もどこの豪族の姫君なのでしょう。大王の諸豪族の平定の手段は、武力だけではありません。結婚というかたちで、大王は豪族を支配下に治めました。大王の妻として献上された姫君は、大王家に対する人質でした。大王にとって、たくさんの豪族の姫君を手に入れることは、自らの権力の強大さの証明なのです。一番歌は、強大な力によって豪族たちを支配した大王の歌なのです。

です。昭和五年（一九七八）、十年前に稻荷山古墳から発掘されたまま腐食の進んでいた鉄剣の保存処理のため、奈良県奈良市の元興寺文化財研究所でX線検査を行ったところ、百十五字の漢字が金象嵌で彫り込まれていたことが判明しました。

① 辛亥の年七月中、記す。

② 乎獲居の臣。上祖、名は意富比埜。其の児、多加利足尼。

其の児、名は弓已加利獲居。其の児、名は多加披次獲居。其の児、名は多沙鬼獲居。其の児、名は半弓比。其の児、名は加差披余。其の児、名は乎獲居の臣。

③ 世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。獲加多支鹵の大王の寺、斯鬼の宮に在る時、吾、天下を左治す。

④ 此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

その内容をまとめますと、次の四点になります。

① 【銘文の制作年月】この銘文は、辛亥の年（四七一）の七月に記されました。

② 【ワワケの臣の系譜】私ワワケの臣の上祖は、オホヒコと言います。私ワワケの臣はその八世の子孫です。

③ 【ワワケの臣の功績】私の一族は、代々、杖刀人の首として大王に仕えてきました。ワカタケルの大王の宮がシキの宮に在る時、私は大王が天下をお治めするのを左治しました。

④ 【剣の由来】このことを後世に伝えるため、私は百練の利刀を作らせて、そこに私の奉事の根原を記しました。

「杖刀人の首」とは將軍のことです。「左治」とは、大臣として統治を補佐することです。ワワケの臣は、將軍・大臣としてワカタケル大王に仕えたことが鉄剣には記されています。ワワケの

臣の上祖はオホヒコであると記されていますが、オホヒコは、『日本書紀』崇神天皇十年に、四道將軍として北陸道に派遣されたことが見えます。

九月の丙戌の朔甲午に、大彦命を以て北陸に遣す。武渟川別をもて東海に遣（つかは）す。吉備津彦をもて西道に遣す。丹波道主命をもて丹波に遣す。

大彦の子の武渟川別は、同じく四道將軍として東海道に派遣されました。『日本書紀』崇神天皇二十五年に、武渟川別は阿倍臣の祖であると記されています。四道將軍の記事は阿倍氏の一族が大王の將軍として東国平定に活躍したことを語っていますが、稻荷山鉄剣はこの事実を考古学から証明しています。

稻荷山鉄剣の銘文が解読されたことよって、明治六年（一八七三）に発掘されて、一部解読されていた銀象嵌の銘文が同じワカタケル大王のことを記していることが明らかになりました。

① 天の下治らしめし獲□□鹵大王の世、典曹に奉事せし人、名は無利弓、八月中、大鉄釜を用い、四尺の廷刀を并わす。八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の刊刀なり。

② 此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、□恩を得る也。其の統ぶる所を失わず。

③ 刀を作る者、名は伊太和、書するのは張安也。

その内容をまとめると、次の三点になります。

① 【刀の由来】この刀は、ワカタケル大王の世に典曹としてお仕えしたムリテが、作らせた名刀です。

② 【刀の効用】この刀を所有する者は、長寿にして子孫は榮

天路を壅塞するを忿り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄かに父兄を喪い、垂成の功をして一簣を獲ざらしむ。居りて諒闇に在り、兵甲を動かさず。是を以て、偃息して未だ捷たざりき。

③今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁文武功を効し、白刃、前に交わりとも亦顧みざる所なり。若し帝徳の覆載を以て、此の疆敵を摧き克く方難を靖んぜば、前功を替えること無けん。竊かに自ら開府儀同三司を仮し、其の余も咸な仮授して、以て忠節を励む。

その要旨をまとめると、次の三点になります。

①【広大な領域を平定したこと】私は皇帝陛下の領土を広げるために、自ら甲冑（かつちゆう）を纏（まと）って、たくさん山河を踏み越え、席を温める暇もなく戦ってきました。平定した国は、東方の毛人（もうじん）を征すること五十五国、西方の衆夷（しゅうい）を服すること六十六国、海北（かいほく）を平らげること九十五国にも上りました。

②【高句麗が百済を征服したこと】私はこれらの国々を率いて皇帝陛下にお仕えするため、百済（くだら）からはるかな海路を越える準備を怠りませんでした。しかし、高句麗（こうくり）が、無道にも百済を占領し、殺戮をやめません。私が皇帝陛下に使者を出そうとしても、高句麗に妨害されてしまいます。

③【高句麗征伐のために協力して欲しいこと】今に到り、私は甲を練り、兵をおさめ、高句麗を討とうと決心しました。皇帝陛下の四海を覆（おお）う御徳によりこの強敵を打ち砕き、わが国難を除いて太平をもたらしていただけならば、我が国は歴代の皇帝への忠誠を忘れることはないでしょう。

武の宋使派遣の三年前の四七五年、高句麗の長寿王が百済の漢城を陥落させて、百済の蓋鹵王を殺害するという大事件が起きています。蓋鹵王の子の文周王は南の熊津に遷都して即位しますが、このときに百済は一旦滅亡の憂き目に遭いました。『日本書紀』雄略天皇二十年（四七六）には蓋鹵王が殺害されたこと、二十一年（四七七）に雄略天皇が文周王に熊津を与え、百済を復古させたことが記されています。武は倭との友好国である百済を救援するために、百済出兵の根拠となる「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍、倭王」の爵位を宋に求めたのでした。しかし、宋から与えられた称号は、「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、倭王」というように、百済は倭王の管轄する国として認められませんでした。これは、同じ冊封国であった高句麗に配慮したためであると考えられています。さらに、翌昇明三年（四七九）、宋は同国の侍中・司空・録尚書事・剽騎大將軍であった蕭道成に乗っ取られて滅亡します。倭王武は希望していた爵位が得られなかったばかりか、頼りにしていた後盾をも失ってしまったのでした。

●二本の刀剣銘

雄略天皇の宋への遣使は、期待した結果は得られませんでした。しかし、後世の古代史の研究者には大きな恩恵をもたらしました。倭王武の上表文から、雄略天皇が「東方の毛人」の「五十五国」、「西方の衆夷」の「六十六国」、「海北」の「九十五国」というように、広大な領域を支配していたことが確認できるからです。雄略天皇の支配領域の広大さは、国宝に指定されている二本の刀剣から知ることが出来ます（注4）。

国宝の二本の刀剣とは、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣（埼玉県立さいたま史跡の博物館蔵）と、熊本県玉名郡の江田船山古墳から出土した銀錯銘鉄刀（東京国立博物館蔵）

には、雄略天皇八年（四七一）二月、十二年（四七五）四月の二回、天皇は身狭青を「呉」（南朝の当時の当時の国名は「宋」です。「呉」は南朝の総称として『日本書紀』で用いられているのだろうと考えられています）に派遣したとあります。

八年の春二月に、身狭村主青・椋隈民使博徳をして呉国に使しむ。

十二年の夏四月の丙子の朔己卯に、身狭村主青と椋隈民使博徳とを、呉に出使す。

この時期の『日本書紀』の年代は正確でないので断定出来ませんが、この二回の遣使のいづれかが、『宋書倭国伝』に記されている使節なのだと推測されます。平安時代の氏族名鑑『新撰姓氏録』によれば、身狭氏の祖先は建康を開いた孫権の息子孫高であると記されています。

左京諸蕃 漢 牟佐村主 呉孫権の男、高より出る也。

青は、呉の王族の出身であったかはともかくとして、中国系の帰化人であったので、宋への使者として選ばれたのでしょう。

武の宋使派遣から二百年後に成立した本ですが、唐の玄宗皇帝の時代の儀式書『大唐開元礼』賓礼には外国からの使節の接待する儀式の次第が記されています。宮殿における皇帝謁見儀式の次第は、

- ①儀式の前日、皇帝御座の背後のついたて、外国使節の席、宮掛、指揮者の席などを設定。
- ②当日、外国使節の席を設定（北向き、西が上座）。進行役

など入場。近衛兵、位置につき、指揮者・演奏者入場。

③外国使節、引率されて儀式会場の宮殿の門に到着。西より東面する。

④戒厳令。太和の樂を奏し、皇帝、輿に乗って、出御、御座につく。

⑤舒和の樂を奏し、外国使節入場、席につく。

⑥中書侍郎が使節より国書を受け取り、西階より昇殿して皇帝に読み上げる。

⑦国書を読みあげるあいだに、官吏が贈り物を受け取る。

⑧皇帝、通事舎人を媒介にして相手国の元首について問い、使節は返答。皇帝、使節団について問い、使節返答。

⑨舒和の樂、外国使節退場。太和の樂、皇帝退場。儀式終了、

です（注3）。当時の宋の皇帝の順帝は、わずか九歳でした。皇帝謁見儀式において、太極殿の前の庭に控える倭国の使節団の代表から倭王武の上表文を受け取った中書侍郎は、太極殿に昇殿して、この幼い皇帝の前で上表文を読み上げました。武の上表文は『宋書倭国伝』に残されています。

①封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑を擻き、山川を跋渉して寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国。渡りて海北を平ぐるること九十五国。王道融泰にして、土を廓き、畿を遐にす。累葉朝宗して歳を愆らず。

②臣、下愚なりと雖も、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を駟卒し、天極に帰崇し、道百済を逶て、船舫を装治す。而るに句驪無道にして、囟りて見呑を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。毎に稽滯を致し、以て良風を失い、路に進むと曰うと雖も、或は通じ、或は不らず。臣が亡考濟、実に寇讐の

大王の歌―『万葉集』 1―

Great King's Song —Study of "Manyousyu" Song No.1—

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健

●はじめに

『万葉集』巻一の巻頭には、雄略天皇の歌（『万葉集』1-1）が載せられています。西郷信綱（注1）が「これは万葉集冒頭の歌で、雄略天皇の歌とされているが、むろんそういう伝承に過ぎず、特定の作者を決めるわけにはいかない。特定の作者を拒絶するような、古風な歌謡的なうたいぶりが、ここにはある」と述べていますように、一番歌については、これを雄略天皇の作った歌だとは考えず、宮廷に伝承されてきた古い歌謡と考える見方が一般的です。では、万葉集冒頭歌の作者として仮託された雄略天皇とは、どのような人物だと考えられていたのでしょうか。本論では、雄略天皇について、その外交政策から考えてみたいと思いません。雄略天皇の時代には、朝鮮半島で大きな動乱が起こりました。雄略天皇はその動乱に対応するため、積極的に外交政策を展開しました。雄略天皇の外交政策というフィルターを通して、一番歌の作られた背景について考えてみたいと思います。

●倭王武の上表文

中国南部を流れる長江と秦淮河との合流点に石頭山という岩山があります。石頭山は水上交通の要衝に位置することから、戦略的な拠点として注目され、楚の威王七年（前三三三）、ここに城が築かれたと伝えられています。後漢の建安一六年（二一一）、

赤壁の戦いに勝利した孫権は、魏の曹操の再来寇に備え、石頭城を改築し、ここに呉の水軍の基地を置きました。呉の黄龍元年（二一九）、孫権は呉の初代皇帝として即位し、帝都を石頭城の東の建業（現在の江蘇省南京市）に定めました。以来、建業（建業は、東晋の時代、皇帝の諱を憚り建康と改められました）は、南朝（呉・東晋・宋・齊・梁・陳）の帝都として栄えました。建康を帝都とした六つの王朝の時代を、六朝時代と呼びます。

宋の昇明二年（四七八）、建康宮の中心となる太極殿の正面に立てられた大司馬門、宣陽門から直線に伸びる御道と、長江へと続く秦淮河とが直角に交差する地点に設けられた船着き場に、倭王武の派遣した使節が到着しました。船着き場の前には、建康の正門である朱雀門が聳えています。ここから、この船着きは朱雀航と呼ばれていました。建康ができてから約百年後に書かれた『顔氏家訓』によれば、朱雀航には二万隻の船が集まっていたと言います。建康は、江南の水上交通網を基盤とする商業・軍事都市として繁栄していました（注2）。百済南岸の港から出港した倭王の使節は、黄海を横断して山東半島に上陸、陸路を辿って南下、最後に長江を船で渡って朱雀航に到着したのです。

宋の歴史書『宋書倭国伝』に武と記される倭王の日本名は、ワカタケル大王、すなわち雄略天皇です。『宋書倭国伝』には、倭国の使節の名前は記されていません。日本の歴史書『日本書紀』